

A-120 調理済食品についての摂食行動と意識

—— 年齢階層別 ——

学習院女子短大 岡 啓次郎・○井原澄子 矢崎美智子

目的 われわれは、調理済食品の現在および今後の動向やその望ましいあり方を知るために、これらが家庭内でどのように利用されまた評価されているかを対象の属性10項目および生活態度5項目とあわせて調査、検討した。

方法 対象は都内女子校3校の同窓会名簿より年齢階層別ランダムサンプリングにより20才以上の1360名を選出した。調査は質問紙郵送法により昭和53年9月から10月に行なった。(回収率52.1%)なお、本報告は調理済食品と既製衣服などに関する意識と実態についての調査研究の一部である。

結果 フェースシートから得られた対象の概況は生活面、意識面ともかなり高水準であると考えられるが、利用率の高いのはジュース類で逆に利用率の低いのはレトルト食品であった。ジュース類やつけもの類は年令が下がるほど利用率が上昇し、即席食品や冷凍食品については36~45才代に利用率のピークがみられる。利用する理由は簡便性、時間経済性などを重視するものが多く「栄養がある」と評価するものは極めて少ない。利用しない理由は味などの嗜好性と不安感あげられる。摂食時に即席食品に他の材料などを加えるものは53.9%で、これには年令別の差はみられない。また献立作成時に重視する要素として高年令では栄養、年令が下がるほど嗜好が多くなる。食費は46~60才および若年層で、調理時間は41~45才が重視されている。こうしたことと調理済食品の摂食行動との関連も指摘される。